

漢に堪えねばならぬ。そのような心情の機微が、草の葉を見てもかれに「牙」の字を選ばせているのではないか。しかもこの文字は賀に近いところに先例がある。韓愈の「苦寒」¹⁷³³の第八句は「萌牙夭勾尖」である。夭勾尖は批著『韓愈』^{六三一}にいうように、『淮南子』時則訓の「通勾萌」をもじった語で、愈の句は、まがりくわつたり尖つたりして芽生えなやんでいるものが、芽ばえるまえに死んでしまう、というほどの恵。愈の集でも、この牙を本によつては芽とする。芽と牙はしばしば通用されるけれども、この場合も、牙の視覚に訴えるものを、韓がすくいとつているのに違いない。「苦寒」は貞元十七八年の作で、賀の牙字を含む諸作に先んじるだろう。「過華清宮」の芽牙も、もとより目の前の前のセリの芽を指すが、そのセリの芽を見つめる賀の孤独な心情が尖りふくらんでいる。「感謳」の春牙には税吏にむしりとられようとする農婦の悲しみが尖り、「新夏歌」ではひねくれ尖つた豪風も吹きよせる南風に抗しきれずにぼう、と上氣している趣がある。賀の鐵観的凝視が思いがけなく描き出すのは、かれのふるえる自我である。芽牙・燕牙・拳牙・宮牙はみなかれの尖つた自我であり、その牙を芽とすることは、たぶん李賀を夸張ならぬ一般に引きおろすことになるだろう。

(辛亥四月一日一八日)

▲雜記・12▼

大和

昭和四十四年にわたしては「杜序一宇賀小記」で杜牧の「李賀歌詩集序」を分析した。そのとき年号の「大和」についてへ「大和」の「大」を文苑英華・元刊本・王注は「太」とし、それが正しいけれども唐人も後代の人も「大」とも「太」とも書くとした。荒井健氏がへもとの論文

に当っていなければ臆説を申上げることになり、工合が悪いのですが、李仲勉氏が「太和はあやまちで、大和が正しい、それ口自分の考証がある」といつて、いたのをどこやらで読んだ記憶があります」と教えられた。以来、見うるだけの本氏の著書に注意しているが、求めるものを見出しえない。ところで別に『錢大昕『十駕齋養新錄』(卷六)』に「大と太の二字はまぎれやすい」という一条があるのに気づいた。「唐の文宗と（五代の吳主）楊溥の年号はみな大和であつて太和ではないのだ。遼の道宗の年号の大康も太康ではないのだ。晁氏の歴代紀年は字でもつて今類していふからきつと間違つていなのはす。いま遼史の刊本はみな太康としていて、たれも正そらうしない」「これだけではなぜ大であつて太でいけないかはもうひとくはわからぬが、錢氏のいふことだから、ます正しいのであろう。いま日本で出ている字書・事典・年表のたぐいで文宗の年号を太和とするものが多いのは、わたしと同じあやまちを犯しているのであろう。(四月八日)

▲ 雜記・13▼ 新唐書世系表

本号九ページ(李神通上)に宋室世系表に誤りが多いと書いた。『十駕齋養新錄』(卷六)「京
唐世系表脱漏」に「唐大詔令に元微之撰の嗣虢王溥大曇少卿制と錢珝撰の宗正卿封王頤大理
卿制がある。このふたりの嗣王の名は、宗室世系表にはいずれも記載されになつてゐる。たぶん
唐代の中期以後、皇族の王家を嗣ぐ人たちの就職がむづかしくなり、家譜や詔令も散佚し、歴史
を書く人たちの資料がなくなつたからだろ」なお『洪邁『容齋隨筆』(卷六)にも「唐書世系表」
といふ一條があり、ここでは宋室世系表は各家の家譜をうのみにしたため笑うべき誤りを犯して

いるとして、その例に沈氏をあげている。情報の過多が、過少に劣らず事実をまげる傾向だが、両方に共通することは、権力は事実を好みない、という点であろう。すなわち、権力がら遠ざかれば事実は記録事項からの脱落、という形で消滅され、権力に近づくと事実は記録事項の修飾という形で消滅する。今日の議会にも議事録から削除するという制度(?)が保存されていて、学者がこぞつてこれに反対したということを寡聞にして知らぬ。李賀が此管沈煙霧舜祠と苗蠶調補引にうたったのは抹消された事実は地下で生きつづける、ということとも、うたいあげているように、わたしには感ぜられる。

(辛亥四月八日)

△ 雜記・14 ▽ 舞 風 舞

「殘絲曲」20646(卷本002)は李賀の作でも二とにわたしの好きなものの一つ。そのくせわかりにくいところがあつて、『幽斎集』以後もしばしげ改訳を試みているが、いまだ適訳をえない。原文は「垂楊葉老鶯啞兒 殘絲欲斷莫蜂歸 緑鬢少年金釵客 繰粉臺中沈琥珀 花臺欲暮離去 落花起作迴風舞 榆莢相催不知數 沈郎青錢夾城路」第三句の少年を北宋本・宋蜀本・金刊本以外はみな年少とするが、わたしは少年の字面を愛する。第四句の沈は北宋本では沉とする。俗字だが、シンとよむ人名には沈を、チンとよむ動詞などには沉を、というふうに使いわけしているのだ。ついでにいうと鳥のツバメには鳶を、国名や宴会には燕を、といった使いわけが北宋本甲でしかなり厳密にされており、北宋本乙(外集)ではその区別がない。なお第七句の焚を宋蜀本は焚とする。第八句の夾を黄評本は焚とする。誤りである。陳紇は校字の条にこの二とを記さない。

さて第六句の「迴風舞」である。この語について諸注はみな解説せず、斎藤注だけが「迴風はつむじかぜ。曹植の洛神賦に「其の形や……飄飄たり流風の迴雪の若し」とある」という。舞うものを美人に見たてるとすればこれは面白い。ただ、落花と神女ではややぞぐわぬ氣がする。それに圓舞はやはり迴風ではあるまい。賀の「河南府試十二月榮書・五月」20672,02275(校本028)の第五句「迴舞舞涼殿」の注としてならびに「圓舞」の解説に、「圓舞」なら「物有氣而圓性今習有隨而先偏」と続く句意を「殘絲曲」に流用できなくはない。とはいってもこの「圓舞」は「悲回風」をひいて解釈する。「悲回風」なら「物有氣而圓性今習有隨而先偏」とはいかがわぬ。圓舞をただの「つむじかぜ」の舞とみて理解できないわけではないが、歌の「」の句は、目にふれたものをそのまま写したにしては隨筆なほのめきをもたらすさる。そのほのめきが読むもの的心をそのまま行き過ぎさせない。『漢魏叢書』同書宋齊竟陵王書を読んでいて〔唐〕郭憲「別國洞冥記」卷四の次の条に及んだとき、不意に「殘絲曲」が目に浮かんだ。「帝所幸宮人、名麗娟、年十四、玉膚柔軟、吹氣勝蘭、不欲衣縷拂之、恐憇痕也。每歌、李延年和之於芝生殿、唱迴風之曲、庭中花皆翻落、蓋麗娟於明離之帳、恐塵垢汚其體也、常以衣帶縛麗娟之袂、閉於重幕之中、恐隨風而去也。麗娟以琥珀爲風、蓋衣縷裏、不使人知、乃言骨節自鳴、相與爲神怪也」これもまた舞ではない。しかし、迴風の曲を唱へば庭中の花みな翻落す、という句の喚起するイメージは、そのままで落花起作迴風舞ではないか。麗娟の衣縷に鳴る音を人が骨節自鳴といつて、琥珀のせだと先にことわつてあるのに、読む者の目の中で美女の肌膚がみるみる透明となり、そ

の白骨がきしめきはじめる不気味さがあり、それが「殘絲曲」の何とも名づけようのない複雑な味わいと照応する。

「別國洞冥記」は漢の武帝に関する記事が多いので「漢武洞冥記」ともいう。著者を後漢の郭寔と伝えるけれども『四庫全書總目提要』は六朝の人か寔に偽託したのであろうという。後漢の文章は綺麗なものでもも、とエネルギッシュである。怪奇なものもなお素様である。「洞冥記」の文章にはムンクの絵とや画うところがあり、正に世紀末的といえよう。李賀の詩はすこく強く、破算で、「洞冥記」とは違った文体だけれども、かれを育てた蔚祖士に六朝もの多いことはまぎれもない事実なのだ。

▲雜記・15▼ 阿嬢・続

雜記5に「阿嬢」について書いたが、清俞正燮『癸巳存稿』卷四に「嫗母」の条を見たので、続ける。「嫗母」ということは宋書の何承天伝に見える。北齊書の恩偉伝にいう。陸令宣曰後主を養育した。後主は令宣を阿嬢といつた。阿嬢といつよび方は、王た算(あさ)といつことだ。乳母の名ではないのだ。大藏經の翻字の函に收められる隋訳の善思童子經に、嫗母といつことばがある。宋敏求の唐大詔令二十五に贈嫗婆元氏颍川郡太夫人制がある。

『宋書』の記事曰何承天が著作佐郎になつたときすでに老人だったが、同僚に有名人が多かつたので、年少の顕川の荀伯子が承天を嘲つて「嫗母」と呼んだ。これに対して承天は「鳳凰が九羽のヒヨコをしき連れていふと言つがいい。嫗母とは何たることをいふやつだとやりかえし

た語だ。一一一では姫母は「おばさん」というほどの意だろう。『北齊書』の記事は穆提婆の伝にみえる。提婆の母が陸令萱である。実際に乳を与えたかどうかまでは書いてないが役柄からいえば乳母で「乾阿妳」と呼ばれたという。乾とは実質をともなわめというほどの意味だらうから、阿嫗だけなら、お母さん、という意だらうか。『善惡童子經』と『唐大詔令』はいま手許にないので、後につけ加える。

何承天と荀伯子が仕えたのは宋朝で、その都は建業江蘇省、姫母がその地のことばなら吳語ということになる。承天は東海鄭^{山东省}の人、伯子は福川^{河南省}の人。言つた伯子の故郷のことばとすれば李賀の家屬した昌谷に近いことばのことばである。

北齊の都は鄴^{河南省}である。その宮中の人の使つことばは鄴のことばだろうか。ただ、陸令萱のことばが後主に口うつされたとも考えられる。令萱がどこの地の人かわからぬが、陸という姓は異常に多いから令萱もやうだつたのではないか、とは考えうる。とはいへ北齊の朝廷・宮中にいて使用されたことばならば、そこに仕えた士人が、周・隋をへて唐朝の士人の基幹をなしたから、書の都問^切の普通のことばになつていたかもしれない。それならば雜記⁵のわたしの考えはうがちすぎ、ということになる。

それでもやっぱり執着するのは阿嫗の語につけられていた「東注」が李商隱の自注らしく、もし中唐の長安・洛陽で普通に使われていることばならば注する必要がない。注する以上は、長安・洛陽においては特殊なことばだったと考えた方が事実に近いだろうからである。いずれにしても

「この問題は早急には結論は出しへいようだ。」この問題にはかぎらむ、わたしの誤り、問い合わせをいたただきたい。

(辛亥四月十日)

△ 雜記・16 ▽ 李賀と三島由紀夫

はじめにことひつておく。」(1)で李賀と三島由紀夫の文学・思想などを対比する論文をうちあげるつもりはない。(2)畠田紀夫の西々以来、雑誌は三島、花やかりの森。となり、電車にのつても、道を歩いていても、本屋にはいつても、かれの名を目にせめことがない。いやおうなしに見せつけられるその騒ぎに、強いらされたやじ馬として、ひとこと水をすだけのことである。從つてこの文章は、亡き三島由紀夫氏の靈にかかわらぬ。まして寝殿には含まれ。拙ない筆が万一そこにはかかるようなまぎらはしさを持ちはじることが起るとしても、それはかれの仮面に及びうるのみで、その奥へは踏みこまない。いや踏みこみえない。

やじ馬の本質は無責任である。そのすがたはしばしば下品である。その無責任¹⁴と下品とを避けるために、かつては坊主になり隠者になるという手があつた。いま坊主になれば俗人以上に俗な日日に堪えねばならず隠者はほとんど存在しない。もつとも、昔の隠者にも葬祭の行列を見物した兼好がいて、かれのひとことが無責任なやじ馬のじとう、ためしもある。かれのことばの無責任がやじ馬を人にかえし、生死の責任に因ざめさせたのだろうか。こうなると品の上下は気にならない。しかし、わたしのはそんな上品な話ではない。

ついこの間、本屋とのぞいたら国文学関係の雑誌が、三島由紀夫特集¹⁵をやっている。田辺を

現ただけで買わなかつたから、一へから書くことは、その雑誌自体についていかならずしも正確ではない。だからわたしの心にのこつた印象についてのやじ馬的記述という虚妄である。

目次にはポール・ヴァレリーと三島由紀夫、トーマス・マンと三島由紀夫……といった命令にヨーロッパ（あるいはアメリカも？）の詩人や小説家と三島由紀夫とが、とて結んである類が七つか八つかうんでいて、かれとどつなぐ相手に世親・亨賀・世阿彌などはなかつた。執筆者も評論家や歐米文学を専攻する人が多かつた。『歐米文学と三島由紀夫』という特集ならばひつたりだつたろう。それならば歐米文学の専攻者が主として執筆している二とも尤もだ。しかし『三島由紀夫特集』であり国文学關係の雑誌ならば、わが国の文学者と三島との対比がもつとあつてよかつたのではないか。もゝとまあの執筆者を外国文学専攻者とみたのはわたしの無知のせいだろうか。三島は『豊饒の海』の第三部に世親の句をひいている。『われらの時代の文学』(?)の中のかれの一冊だったと思つがそこには挿んだかれの写真のうえに、長安に男子あり、二十心すでに朽つ、と李賀の句を墨書きしていた。「変質した優雅」というエッセイの中でかれは世阿彌の「大原御草」について、おやうくこれまでに書かれたどの大原御草論にもなかつたであろう無氣味な人間観の指摘している。これらのことは国文学關係の雑誌であつてこそ初めてとりあげ得る問題ではないのか。

わたしは三島由紀夫という作家に長い間注つたく関心もたなかつた。四五年前まではあるう

か、弟の栗田尚雄が「金剛寺はちょっとだけ」、「金剛寺はちょっとだけ」というので、しぶしぶ読んだ。それほど感心はしなかつたが、青年がいちどはかなうす読む種類の小説になるかもしれめという気がした。その後、べつにあてもなく目にふれたものを読んで、「愛の渴き」「鏡子の家」などはおもしろかった。雑誌が何かにのった小説のはじめのほうに李賀を研究する男の出てくるのが、たよくな記憶があるが、その小説について何處も内容も覚えていない。「仮面の告白」を読んだとき、李賀が少しはいっているところと思った。しかしこの小説を書く前に三島が李賀を読んでいたかどうかは知らぬ。わたしはその程度の無責任な読者で、これからもその無責任さを拠るつもりはない。しかし、やじ馬の目からみて、かれの出現と消滅とは昭和文学のかなり大きな事件であろう。警察や消防なら特別捜査本部を設けるだろう。目ぼしい証據は洗いあげて分析するだろう。さきの国文学の雑誌はその本部か。あるいは支部か。いずれにしても事件の現場には近いのだろう。それなら現場に近い証據から洗って行くのが捜査の常法ではないのか。わたしが現場といふのは、日本語の文章、日本人の感じ方・考え方というほどのところをさす。三島の死後、やじ馬が扱い読みした文章の中で感動したのは朝日新聞にのった石川淳氏の文芸時評だった。文芸時評だけれど（あるいはそれゆえ）思想家としての三島の文章の特色を見事にすくいあげて解説していると思った。

（辛亥四月十一日）

やじ馬の無責任な文章ながら、書いてしまってから少し気になつて、まことにあの雑誌をならべていた本屋に行ってみたら、なくなっていた。出たついでだからとほかの本屋を四五軒まわった

たが、やはりながつた。飛ぶように売れたのか、出版元にかえられたのか。やじ馬が気にやまなくて、ものはそれぞの値へ、詰ついてゆくのであろう。わたしが教員としての義務から解き放たれるとき、なお小説を読む姿勢、気がのこつていて、いまほど、わがしくなくなつていた三島由紀夫の全集をつづり読むことにしよう。それまで仮面上、さようなら。(四月十二日)

△ 雜記・17 △ 阿嬢・又続

『唐大詔令集』一九五九年商務印書館刊 卷二十五に收める「贊頌元氏頌川郡太夫人制」は「古者緣情立禮、著慈母之制、蓋聖人示德无不報之理、而漢宣帝亦追錄於齊郡鄡嘗有阿保之勤、以功深淺、並授封賞、記于前典、歷代是之、故贊婆元氏、朕在襁褓、賴其撫育、推婦就溫、慈愛特深、可謂仁人厚惠茂德者矣、可贈頌川郡太夫人」大曆八年六月 大殿の天子は八代の世宗である。二二二での贊婆 け乳母である。

「善思童子經」大正大藏經卷十 には「……有一童子、名曰善思，是時善思，在於自家、重闈之上、嫗母抱持……又仏世尊、神通力故、令此童子、忽然以偈、白其嫗母、作如是言、今有譽微妙、霑諸言樂聲、願嫗放我身、捨置於樓上……阿嫗今觀此天象在虛空……」二の嫗母、阿嫗はやはり乳母うしく、嫗母は一般的称呼、阿嫗は童子からのよびかけとして区別されている。手許の仏教事典によれば、同經に闍那崛多_{Jāṇapāda}の訳、かたは北インドのガンダーラに生れ、布教のためマラヤを二え中央アジアを通、て北周明帝武成年中に長安につき仏典を翻訳し、武帝の破仏にあい西域に去り、隋に入り文帝の招きに応じ洛陽に来て訳經に従つた。「善思童子經」は再来時の訳

といわざる。それならば、嫡母・阿嬢は周・隋間の長安・洛陽のことばといふことになろう。

ただ、これらの詰例では、嫡母・阿嬢はほとんど乳母に屬して使用され、寒母に対する使用ではない。李賀が臨終に「阿嬢」とよんだ「太夫人」はかれの実母ではないのか。実母だとすれば、それをよぶ阿嬢は、長安・洛陽で乳母をさすその語とは、（標記法は似ていても）違うのではないか。もし「太夫人」が乳母ならば、士人の家の乳母も太夫人とよぶことが許されるのか、こうした問題が派生し、李賀の家変については、まだやまざまに検討されるべきことが少くない。なお、「善思善子經」はその内容と表現とに、唐代の詩文と密接なかかわりがありそうな気がする。暇を得たら考えるつもりだが、どなたか先にやってくれれば幸いである。（四月十三日）

▲雜記・18▼ 唐人辨声韻

『十駕齋新錄』卷十六「唐人辨聲韻」の条にいう。へ唐代の人は声韻を区別することを喜び、日常のことばでも、いかげんにしなかつた。胡曾の「妻の身内の者のことばが正確でないのをからかう」詩に「呼十卻爲石、喚針符作眞、忽然雲雨至、總道是天因」（十、といつたら石のこと、針、というのもほんとうで、雨ふりそうにべもつたら、すべては天のせい、といふく十と石、針と眞、陰と因の発音がごっちゃになつていることを皮肉った詩である。胡曾の例を一般化してよいのかどうか知らぬが、そつして間違ひがないのならば、この一条、阿嬢についての雜記三章の注になるだろう。

▲雜記・19▼ 索漢

（辛亥四月十四日）

どういう風の吹きまわしか、京都ゲートインステイティートから「ドイツ映画のヌーベルバー
グ」を見にこいといつ案内が届いこんだ。古い波の間で漏れかけているのがかわいそだから、
たまには新しい波で沐浴なさい、といわれたような気がした。入場無料、というところにも會書生
への友情が溢れ、好意なみしがたく、見にいった。「妥協せざる人々」「過去のない女」「出か
せぎ」の三つ。戦争の傷痕があり、疎外があり、裸がある。三つはそれぞれテーマもねらいも違
うのだろうが、退屈を絵にしたらこんな映画になるのだろうかと面白かった。退屈といつても、
アンドレ・ジイドの「パリュード」みたいに優雅ではない。コンクリートの床にあたる木製の椅
子の音、タイトルにおちるビンの音、どなり声、たえずする雜音、陰気な、白っぽい画面。入口で
もうつた印刷物に「オーベルハウゼン宣言」というのが引いてあって、古き映画は死んだ。われ
われは新しい映画を信ずる、という言葉で結んである。退屈といつより索漠というべき、この映画
はゲーテの何とかわかるのか。ゲーテの作品はすべて当時の新しい波であつたのだろうが、もつ
とくつきりしている。「ファウスト」第二部はわかりにくいくものをふくんでいるが、たいへん面
白く退屈させない。もつともそれは、あるいは当時の人には、断片を無作意につなぎあわせたよ
うに感ぜられたかもしれない。そうだとすると、いまの新しい波のきれぎれはゲーテの末裔といつ
ことになろうか。きれぎれといえば、李賀の詩が詩論家たちからやつつけられた評語の中にそん
なのがあった。賀の詩にも索漠の感情を出したものがある。しかし、この新しい波にくらべる
と、生々として有機的である。この新しい波は、セリーズよりも無機的な方向に拡散しつつある

よう見える。ピカート博士のいう破壊された頬をさうに無機的に、というのは悪魔もよりつかぬガラクタの世界に、ヘドロの世界に、映画の世界を開発しているのが、この新しい波であるように見える。もっともそれは、映画という虚構の中での開発であるから、現実の世界の開発に対する批評にならうるという可能性はある。作者たちはそれを圖々としているのだろうか。それはそれとして、ピカートの著書を日本に翻訳紹介した人は、京都ゲーテインスティテュートの会員か何かではないかという気がするが、その人はこの新しい波を見たろうか。見たとしたら、どんな顛をしたろうか。想像すると何やらすぐつたくなつてくる。くすぐつたがるわたしの頬も、今日の観客の大部分であるヒッピー風の青年諸君には、問が抜けて見えたことだろう。(四月十四日)

△雑記・20▼ 刻削暴露

昨夜、夢を見た。場面は、新しい波の「出かせき」そつくりの下町。ああまた肩のこる一時間半か、とため息つきながら眺めると、人物は昨日のドイツ人たちとギリシャ人ではなく、ある大学の教授会のメンバーで、その連中がトランプをしたり、裸になつたり、抱きあつたり、じやみやたらに呑み、食い、タバコを吹かし、その場にいない男と女の間を気にしている。昨日のけ素漢どはしていたが、出てくるのは外国人ばかりで、適当に美男美女をまくばつてあって、裸体けさすがに見るに堪えた。わたしは日本人の出てくる映画はあまり好きでない。まして服をきせてキうじて人前に出せる連中へわたし自身はそれ以下だが)がどたばたやるの見るのは好きでない。美女もあり美男もいるのだけれども、だ。そのうち登場人物がわが住居の近所の人になり、兵

隊時代の戦友になり、それからあとは人物が「ちやーちやー」に入りまじり、見物席にいるはずのわ
たしまで、喧嘩の中にすきこまれ、なぐられたり、なぐりかえしたりして、いる中に、目がさめた。
午前三時半。近所の新興宗教の信者たる大好きな声で祈つて、いる。夢を語るのは痴人だそうである。
またたくバカバカしい夢だった。ところで李賀に「夢天」があり、その師の懿愈にも「記夢」があ
り、孔子は周公を夢みることがなくなつたと嘆いて、いる。孔子も痴人に違ひない。外国人であ
つても、日本人であつても、教授であつても、熊氏ハ氏であつても通用するといふのは、「出か
せぎ」というあの映画に普遍性があるためか。それは作者の演劇術がすぐれるためか。あるいは
索漠が普遍となつたためか。どもあれ、あの映画は「天物を抉剥刻削して、その情状を暴露し、
萌芽より槁死に至るまで、隱伏する能わざらしむ」る哀のものといえるかもしだめ。先刻ご承知
のよう、唐の陸龜蒙が「李賀小伝の後に書す」という文章で使つた言葉だ。わたしにとつては生
々として有機的に見える李賀の藝術が同時代人には無機的に見えたのだとすると、新しい波はどうなるのか。わたしなどもいつのまにか虚榮的保守性の中で居眠りはじめているのか。虎闘師練
の『濟北集』卷十一にいう「趙宋の人の、詩を評して朴古平淡を貴び奇工豪麗を賤しむは、尽々
すとなすのみ。それ詩の言たるや、必ずしも古淡ならず必ずしも奇工ならず、理に適するのみ。
おおむね上等は淳質にして言は朴古に近し。中世より以降は情偽あらわれ言は奇工に近し。達人
高子、時に隨い諷諭し性情に復らしむ。あに朴淡奇工に拘せられんや、ただ理に適するのみ。
周公の言は朴なり、孔子の言は工なり。二字は共に聖人なり。なんぞ言の工朴を以て而して聖を

論せんや。書の文は朴なり、易の文は工なり。なんぞ文の工朴を以て而して経を論ぜんや。聖人は時に順いて語を立て、事に応じて文を垂る。あに朴工をしと言わんや」「それならば、李賓の刻削暴露も新しい波の索漠も順時立言・応事垂文の事業であろうか。夜明け前にめざめたせいか、夢のやめきらぬためか、わたしの感情も論理も、もうろうとしているようである。(四月十五日)

正

誤

創刊号 二 頁 10 行 密韻 密韻様と訂正。一一一頁 3 行 皇甫 皇甫湜と訂正。
 第三号 八 頁 14 行 「」と訂正。一五 頁 印刷の出でいないところがあるので念のため記す。
 一行 早かれ 3 行 李淵はついに 4 行 河東でつかまり 5 行 あぶない 6 行 食べ物も
 7 行 神通を 8 行 使つて 9 行 大侠客として 10 行 公主と呼ばれる 11 行 遷絡をとつて 12 行
 二人づれではいづまい 11 行 に曲つて 13 行 あなたはとにかく 14 行 やすいでしょう 15 行 一八 頁
 5 行 兵をわか 6 行 兵をわかちと訂正。13 行 洛州：省 洛州：河南省 と訂正。一六 頁 1 行 方
 という ないといふと訂正。因一 頁 7 行 福川 福川と訂正。四八 頁 13 行 タバカ タバコ・ハ
 ヒ訂正。16 行 どたばたやるの どたばたやるのと訂正。

見附 和田利男氏「社詩事類索引」五六。荒井健氏『内藤湖南』・小高根一郎氏『黒樹園』¹⁷⁹
 後記 本号を景愛尾(小林太市郎博士・一九六三年五月六日)に捧げる。
 182